特集 I | 伏流水「染織品文化財修復〜横山翠さん、諸井葉子さんインタビュー〜」 轍「日本の手技を世界に届けて」中村三樹男先生インタビュー 特集 II | 令和 4 年度実践コース取材スピンオフ



# NPO JCP NEWS

37

2022.12.15



### 令和4年度 定例総会を開催

JCP の令和 4 年度定例総会は昨年度に引き続き、感染リ 第 3 号議案) 令和 4 年度予算案・事業計画案 スクを下げるため、電磁的表決にて行われました。本報 【収入】 告では、令和3年度決算、令和4年度予算および役員改選・ 会員動向をお伝えいたします。

開催日時:令和4年6月29日(水)

表決方法:電子メールによる電磁的決裁及び議長、議事

録署名人同席による議事録作成 回答者:維持会員15名の内

出席;2名、電磁的表決;7名、委任状;2名

維持会員 15 名中、11 名が出席と見做され、定足数を満

たしたため、定款25条に基づき総会は成立。

### 議事次第

第1号議案) 令和3年度決算報告

### 【収入】

• 受取会費	¥ 3,008,000
• 受取寄付金	¥ 5,000
• 役務費	¥ 5,974,820
• 事業収益(受託事業)	¥ 156,653,677
• 事業収益(自主事業)	¥3,117,630
総収入合計	¥168,759,127 — (A)

### 【支出】

• 管理費	¥ 25,014,474
• 令和 2 年度納税	¥ 7,195,800
· 事業費 (受託事業)	¥ 112,335,542
· 事業費(自主事業)	¥ 5,673,631
・その他	¥ 41,555
総支出合計	¥ 150,261,002 — (B)

【収支差額】(A) - (B) =¥ 18,498,125

※令和3年度法人税、事業税控除前

※上記は単年度の収支です。HP に貸借対照表を掲載して 議案 4. 会員の動向 おりますので、そちらもご参照ください。

第2号議案) 令和3年度事業報告

① 文化財保存技術の研究開発

② 文化財保存修理専門家の養成、研修事業

③ 災害救援活動

④ その他

本部7件、九州支部1件

• 受取会費	¥ 3,268,000	
• 受取寄付金	¥ 50,000	
• 役務費	¥ 6,000,000	
• 事業収益(受託事業)	¥ 151,585,881	
· 事業収益(自主事業)	¥3,000,000	
総収入合計	¥ 163,903,881	— (A)

### 【支出】

• 管理費	¥ 25,434,060	
• 令和 3 年度納税	¥ 7,554,700	
• 事業費(受託事業)	¥ 130,779,550	
• 事業費(自主事業)	¥ 1,450,000	
• 関西支部借入金返済	¥ 100,000	
総支出合計	¥ 165 318 310	— (B)

【収支差額】(A) - (B) =▲ 1,414,429

- · R4 年度本部事務職 1 名新規雇用
- ・修復事業:陸前高田市立博物館7分野/川崎市市 民ミュージアム3分野
- •R 4年度セミナー: テーマ「文化財レッドリスト ~修復材料の危機と持続可能性~」
- ・例会の開催 約3回
- ・新事業の提案:一般会員向けワークショップ/被 災資料修復についての研究/インターンシップ事業

#### 第4号議案)役員改選について

澤田正昭理事の辞任に伴い、保存科学系の専門家理 事に欠員が生じているため、三輪理事長の推薦によ り、奈良大学学長の今津節生先生が推薦され、未提 出を除く11名の維持会員の賛同により承認されま した。

4月末日現在で308件の登録があります。令和3年 度の入会39件、退会31件。平成30年度から減少 傾向が続いていましたが、令和3年度は若干増加に 本部1件 転じています。登録会員が減少していることが懸念 材料ですが、JCP 創設当時の入会者が高齢化してき 本部1件、関西支部1件、九州支部3件 ていることと、活動に参加してもらえる会員が限ら 本部8件 れていることなどが要因と思われます。

以上



### 【導入】

文化財保存修復の世界に生きる若い力を追う「伏流水」シリーズ。今回は染織品修復に携わる横山翠さん、諸井葉子さんのお二人を特集しました。約5年ぶりとなるこのシリーズでは、共通項である日本刺繍の話題を交えながら、お二人の現在に至るまでにスポットを当てて伺いました。

()お二人が染織品に携わりたいと思ったきっかけは何でしたか?

横山さん:幼少期の環境、両親それぞれの祖母からの 影響が大きかったと思います。父方の祖母は茶道と水 引きの先生でもあり、私自身もお茶会や茶懐石などに 同席していました。祖母は毎日を着物で過ごす人でし た。

母方の祖母は機織りや洋裁が趣味で、貴重な古裂なども集めていました。今でも祖母の暮らしは常に染織品と共にあります。そのため私は自然と和の伝統、染織品が好きになりました。その頃から染織品に携わる仕事、とりわけファッションなど服飾の世界に入りたい気持ちが強かったです。

高校卒業後は女子美術大学短期大学部のテキスタイルデザイン科へ進み、織物や染色を学びました。装飾的なことをもっと知りたいと思い、その後刺繍科へ進み、岡田宣世先生の下で日本刺繍を学びました。その頃は将来、文化財の修復に携わるとは想像もしていなかったのです。

諸井さん:私は母からの影響が一番大きかったです。 母は日本画、組紐、かな書道、料紙づくりなど様々な ことを学んでいました。小さい頃から母と一緒に、展 覧会など芸術に触れる場所へ出かけていました。特にかな書道のための料紙づくりを身近に見ていたおかげで、私も自然と手仕事への憧れを持つようになりました。

そして高校生のとき「将来、何か日本の伝統工芸に携われるような仕事ができたらな」と考え、色々な美大を見学していたときに女子美術大学短期大学部の刺繍と出会いました。伝統工芸の技術を習得するなら基礎から、と考えていたときに「基礎から学ぶことができる」と謳っていた女子美の刺繍はとても魅力的でした。

紙に馴染みのあった私が、染織品に興味を持つことに驚きはありましたが、母が料紙づくりで師事していた大柳久栄先生が女子美術大学の卒業生だったことも、学校選びの要の一つとなりました。小さい頃からお世話になっていた先生からご助言もいただいて、女子美術大学短期大学部の造形学科へ進学を決め、日本刺繡を学びました。

ま二人とも幼少期の環境による影響が大きかったのですね。それぞれ刺繍科へ進まれた後、修復との出会いはどのようなものだったのでしょうか?

横山さん:修復に携わるきっかけは、刺繍研究室に山車の引幕の修復依頼が来たことです。岡田先生の指導の下、日本刺繍の技術を使って修復作業を行いました。その作業のお手伝いが最初の修復作業で、今でもよく覚えています。その後研究室助手としての勤務の傍ら、少しずつ染織品修復に携わるようになりました。後世に伝えられる仕事ができた、というのが嬉しく、素晴らしい仕事だと感じます。修復を通して、昔の人の歩んできた生活の営みや技法が見えてきて、もっと知りたいという探求心も芽生えてきました。

最近では修復の他に博物館所蔵の染織品のスタイリングを私が担当し、それを撮影していただきアーカイブ化する仕事もしています。きちんとした形で、記録として残すことに意義がありますし、大切な仕事だとやりがいを感じています。

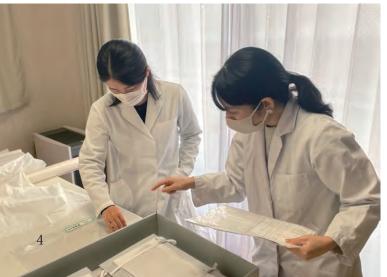
諸井さん:私のターニングポイントとなったのは上代 裂の専門家である澤田むつ代先生との出会いです。女 子美術大学短期大学部での染織史の授業で上代裂につ いての講義があり、先生も修復されていることを知り ました。その後、博物館での修復の作業でもお世話に なりました。

もう一人は石井美恵先生です。女子美での出会いが きっかけで、学生の頃から先生の指示のもと、ときど き染織品文化財の補修補助作業をしていました。女子 美術大学大学院在学時には、授業で先生から染織品文 化財に対する知識や倫理観を学びました。

修復作業に従事したはじめの頃は「触っていいのかな……」と怖い気持ちが強かったです。一方で畏敬の気持ちとでもいうのでしょうか、先人たちの手仕事を目の当たりにする際に常に作品に敬意をもって接するよう心がけました。

横山さんは海外でもお仕事をなさっていると伺いましたが、きっかけはどのようなものだったのでしょうか?

横山さん:染織品保存修復の第一人者である石井美恵 先生からお声がけいただいたことがきっかけで、現在 はアルメニアやエジプトなど海外での保存修復活動を





オーガニックラボのスタッフと

行っております。エジプトでは、2013年より JICA の大エジプト博物館保存修復センターの技術移転、人材育成事業に携わりました。2016年からはツタンカーメン王の染織品 57 点をエジプト人保存修復家と共同で、保存修復と収蔵展示を行いました。この事業は2020年、第27回読売国際協力賞を受賞しました。

Qエジプトで海外の修復家の方と作業するにあたって、 違いなど感じましたか?

横山さん:文化が違うので、日本の修復作業の基本理 念を理解していただくことに苦心しました。片付けや 掃除から始まり、針など道具の取り扱い全てに至るま で指導しました。それが一番大変なことでした。今は 作業内容の意思疎通や意見交換なども難なくできるま でになりました。現在も開館を目指し事業継続してい ます



GEM-CC での作業



アルメニアでの ワークショップ

○ 五井美恵先生がお二人にとってのキーパーソンだと感じました。諸井さんはどのような仕事をなさっているのですか?

諸井さん:私が得意とすることは補修作業など技術面です。糸の太さや撚り加減、縫うときの糸の引き具合

など自分の経験を踏まえて布と糸のバランスを提案することができます。不適切な処置は破壊を招くので、補修も効果的かつ必要最低限に留め、そして誰でもが解けやすいよう考えながらシンプルに縫うよう心掛けています。

○なるほど……未来の修復作業時のことまで考えていらっしゃるのですね。「シンプルに」というのは他の分野にも共通していることだと思います。次に染織品修復をする上で、ポリシーや気を付けていることはどんなことでしょうか?

横山さん:修復対象作品がどのような技法で制作されたのか、劣化や破損の原因は何かをよく考え、最適な処置方法を見出すことです。責任は重いですが、やりがいを感じています。一方で、染織品修復には繊細な技術が求められます。現場では一個人としてできることとできないことがあります。自分が携われることをよく理解し、他の修復家の皆さんと協働して敬意を払いながら作業することを常に心がけています。日本刺繍という伝統技法の継承と共に、その繊細な技術を要する修復作業に微力ながらも従事していきたいと考えています。

諸井さん:私は独断で文化財の補修作業に関わったことは一度もありません。私の役割は染織品保存修復家のプロの指示のもとに作業を行うこと、それがベストだと考えています。また、染織品の修復というと家庭科の延長のような感覚で、お裁縫が得意だから「簡単にできるもの」として捉えられてしまうことがあります。しかし染織品文化財保存修復の世界ではきちんと

した倫理観が存在しています。全てにおいて専門的な 知識が必要になります。

他の分野と協働で作業する場面は多いかと思います。 自分の可能な範囲を見極められることに、プロ意識の 高さを感じます。最後に染織品保存修復を目指す若い 人たち(学生)に何かアドバイスはありますか?

横山さん:素直になることです。どの道に行っても素 直さが大事だと思っています。人の意見をきちんと聞 けないと修復も怖いものです。修復の道に進まずとも、 素直な気持ちを持っていて欲しいなと思います。

諸井さん:与えられた課題をきちんとこなすことかな、と思います。目の前にあるものをよく見て、最後まで誠心誠意携われば、おのずと力はくると思います。また、人との出会いやご縁を大事にしていただきたいです。私も色んな方の助けがあってここまで来ることができました。私ひとりの力では無理だったと思っています。



諸井さん作刺繍

### 【終わりに】

お二人の明るく和やかな人柄が溢れるインタビューとなりました。染織品文化財保存修復では、専門的な知識や倫理観を持って方針や材料を決定する人と、お二人のように技術力で支える人と、常に両輪の力が必要なのだと改めて感じました。今回のインタビューで一番心に残っていることは、幼少期の環境がお二人に大きく影響していたことです。また、日本刺繍を基軸として活躍されるお二人は、常に「自分たちが携われる範囲」を理解し、必要があれば他の分野の人の意見も伺う、そのような姿勢に、作品と真摯に向き合っていることを垣間見ることができました。今後のますますのご活躍に目が離せません。

(文責・NPOJCP 事務局員 本 茉梨絵)



横山 翠 (よこやまみどり) さん プロフィール

神奈川県 横浜市生まれ

専門:日本刺繡、染織品保存修復 活動:フリーの染織品修理技術者と して活動。

大学、専門学校、海外などで染織品 の保存修復に関する指導を行う。



諸井 葉子(もろいようこ)さん プロフィール

埼玉県 日高市生まれ

専門:日本刺繍、染織品保存修復 活動:日本刺繍家として作品の制作

や装束の刺繍を請け負う。

染織品保存修復の技術者としても活動する。



# 「日本の手技を世界に届けて」

## 中村三樹男先生インタビュー

# 日本の手技を世界に届けて

中村 三樹男 先生

(もと大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト・大エジプト博物館 合同保存修復プロジェクト総括/NPOJCP 一般会員)

ピラミッドやスフィンクスなど、屈指の世界遺産を誇るエジプト。1902年に設立されたエジプトの代表的博物館 カイロ考古学博物館は老朽化が進み、ツタンカーメンのマスクをはじめとする収蔵品の保管にも影響が懸念されるため、エジプト政府はギザに新しい博物館「大エジプト博物館」(Grand Egyptian Museum: GEM)及び付属施設である保存修復センター(Conservation Centre: CC)建設を決定しました。2006年、日本政府は博物館本体の建設に348億円の円借款供与を締結(2016年に494億円追加)。館の工事を支援するとともに、保存修復センターにおいては、博物館運営や文化財の保存修復に関わる人材の育成に協力することを決めました。この人材育成プロジェクトのチーフアドバイザーとして、日本とエジプトのチームを率いたのが、中村三樹男先生です。

日本からは JICA(独立行政法人国際協力機構:Japan International Cooperation Agency)を通じて、環境、分析、展示、輸送、各分野の修復技術者など文化財専門家が多数派遣され、現地の人材育成にあたることになりました\*\*!。しかしエジプトは自然環境、政治形態、宗教、生活習慣、国民性において、日本とは大きな隔たりがあります。メンバー同士の対立や、組織間の軋轢から、このプロジェクトは何度も頓挫しそうになりました。しかし紆余曲折を経て、今ではプロジェクトで育った現地の人材が立派に GEM-CC を運営し、次の世代を育てるまでになっています。



研修終了日の関東一本メ

中村先生はどのようにこのプロジェクトを成功に導いたのでしょうか?そこには多くの海外経験で培った、どんな過酷な環境にも対応できる柔軟性と、生まれながらの懐の大きさ、ユーモアのセンス、そして芯に流れる日本人としての矜持があると拝察しました。

今回は、そんな中村先生の人となりを、GEM-CCでのご活躍を中心にお伺いしました。

### 総理府から JICA へ

中村先生は 1970 年に中央大学法学部を卒業しますが、1965 年には既に総理府公正取引委員会事務局に勤務する勤労学生でした。学生時代は学生運動真っ盛り、大学はバリケードで塞がれ入れず 4 年間ほとんど大学へ行かず、残業の毎日だったそうです。

「勉強らしい勉強をしたのは(1977年に)ウェールズ 大学に留学してから」と、中村先生。

先 生はウェールズ大学スウォンジー大学院開発研究 所修士(社会開発)を取得されています。

1970年、中村先生は総理府から JICA に転職します。 その理由は、総理府で出会った先輩の言葉だそうです。 「日本は戦争には負けたが、東南アジアを独立させた。 ただ、(東南アジアは)政治的には独立したが、経済的 には困窮している。(これを何とかするのは)今度はお 前らの番だ。」

もちろん若者なりの好奇心と、飛行機に乗れる魅力 もあったとのこと。両親にも告げず JICA に移った先生 は、研修事業部、総務部情報管理課と歴任します。

1972年、インドネシアのカンポンというスラム街の調査に赴いた時のこと、マーケットでは重篤な病人が買い物客の足下で物乞いをしている状態でした。極貧の人間、最悪の環境を体験した先生は、その後はどこへ行っても平気になったと笑って仰います。そんな酷い環境でありながら、インドネシアの田んぼの風景が自分の故郷の風景と似ていることにとても懐かしさを覚え、自分の祖先はインドネシア人だったかもしれない、と感じたそうです。

中村先生:JICA に入るといろんな仕事をする。農業、 警察、麻薬犯罪取り締まりセミナーとか。何でもやる 本当に面白い組織です。麻薬犯罪は、いったん手を染 めてしまうと治らない。患者が入っている病院を見た ら、やはり悲惨だなと思う。どうしても再発するんで すよね。だから息子には、どんな悪いことをしてもい いが、麻薬にだけは手を出すなと言っています。

最初は5年ごとに職業を変えようと思っていた中村 先生。しかし JICA では全く種類の違う仕事に変わるが わる異動するので、職業を変える必要がなくなったそ うです。

1981年、中村先生はフィリピン事務所に所員として初の海外事業に従事します。その頃は、日本では悪名高いマルコス大統領/イメルダ夫人の時代です。総理府の先輩に日本が独立を助けたと聞いていても、今一つ実感がなかった中村先生ですが、あるパーティーに出席した際、近づいてきた老人に「私が市長になれたのは日本の兵隊さんのお蔭です。読み書きそろばんから田植えの仕方まで何でも教えてくれた。でもアメリカは何も教えてくれず、鉛筆一本くれなかった。」と言われて日本での教育が現地の事実と全く異なることに驚いたそうです。

「日本人は教え魔なんです。自分が損すると分かっていても、知っていることは何でも教えてしまう。」と、中村先生。

### 文化財との出会い、そして GEM-CC へ

そんな中村先生が「文化財」に関心を抱いたのは、1986年から始まった中国敦煌の修復プロジェクトがきっかけです。当時日本画家 平山郁夫先生を団長として、日本政府は敦煌莫高窟の修復に多大な支援をしていました。同僚が担当者だったこともあり、羨ましく思っていたそうです。実は1974年頃、NHKで「未来への遺産」という番組が放映されていて、将来はペルーあるいはマヤの方で仕事をしたいと思っていたそうです。念じ続けると神様が願いをかなえてくれるもの。南米でこそありませんでしたが、やがてエジプトと深いつながりができるようになります。

2000 年、中村先生は JICA エジプト事務所長として エジプトに赴きます。札幌事務所長を最後に 2004 年 に JICA を退職し、その後カンボジアで人材育成センター 所長に就任、2,3年研修事業を行っていました。カンボジアもポルポト\*2のせいで教員がおらず、若い人たちを育成する必要に迫られていたのです。その事業が軌道に乗ってきた2008年、JICAからまたエジプトに行ってくれないか、という電話がありました。「大変なプロジェクトがあるのだが、誰も行きたがらない。」それがGEM-CCのプロジェクトでした。

中村先生:現地に着いた日の夜に保存科学の指導をしている専門家がやってきて、今度うまく行かなかったら私たち辞めます、と言うんですよ。訳が解らなくて・・・。相手が大変な人達だったんです。エジプトとJICAの会議に出席してエジプト側の言い分を聞いてみると、「JICAは人を集めろとか細かいことを言うが、条件を出すのは欧米と同じ。新コロニアリズムである。日本はエジプトを植民地にしたいのか」と言うんです。日本側はシーンとなってしまった。そこで私は「hmm・・・・ if I could」(んん~、もしできるならばね。)と、言った。そしたら今度は向こうがシーンとしてしまったんです。エジプトではこれぐらい冗談言わないとね。

度胸があります!おまけにユーモアも。。 また、次のエピソードも中村先生の度胸を物語ってい ます。

中村先生:GEM では 10 万点展示するというのに、DB (データベース) が全然整備されていない。あると思っていた資料が別の博物館にあったり、登録されている大きさが全然違ったり。これじゃだめだと思い、JICA に断りなく DB を作る若い人を雇いました。相手国政府の人に技術移転をするのが原則の技術協力プロジェクトで、これは絶対にやってはいけないことです。しかしそうしないと先へ進まない、GEM の完成に絶対間に合わないと思い辞職覚悟で雇いました。JICA へは事後報告。JICA も分かっているんですが、建前上ダメとしか言えない。そこでエジプトの副大臣に要請書を作らせ、JICA に提出してもらいました。そして、結果的に認めてもらえました。

現地で若い人を雇うので、DB作成と写真撮影のマニュアルを作りました。テキストも英語・アラビア語・日本語とで作っています。これを作っただけで世界の保存修復家にとても役立つことだと思います。税金でやっている事業だから、映像も記録として必ず残しておくべきだと言ったのですが、JICAも予算の関係上後ろ向きなんですよね。仕方ないから陰に隠れて写真と映像を撮っておけ、と現地スタッフに指示しました。

こういうのはいつかきっと役に立ちます。日本だけではなく海外でも。最初こそレプリカの文化財で実習していましたが、合同保存修復プロジェクトでは本物を使うことになりました。本物ですからその時を逃したら撮れない。保存修復家も撮られるのを嫌がるんだけど、それでは世間に説明ができない。あとで専門家にきちんと編集してもらえば貴重な資料となります。こうした(記録の)面でも日本は世界に貢献できると思っています。

もうひとつ、DBの画面の端に JICA/GEM-CC というロゴを入れるようにしました。世界の専門家はツタンカーメンの DB を見る時に、否が応でも JICA/JEM-CCのロゴを見ざるを得なくなる。そうすると永久に、これは JICA—つまり日本が協力したんだと分かるでしょう。日本の税金を使ってやっているのですから、我々がやった、という事実はしっかり示すべきです。

### GEM-CC でのチームワークづくり

こうしてエジプトと日本の橋渡し役を務めることに なった中村先生ですが、養成すべきエジプト人のチームワークは必ずしも良好ではなかったようです。メン バーの意識を変えるために取った中村先生の戦術は、 ひとつのものを皆で作り上げるという方法でした。

中村先生:彼らはケンカばかりしているんですよ。彼らは「自分が」「自分が」だから、チームワークがないと先に進めないんです。そこで考えたのがロゴづくり。皆でひとつの仕事をやってみたら、と呼びかけ、作ってもらった。これは日の丸と、日本でもエジプトでも一番大事な「アンク( $\P$ )一命」というヒエログリフ。一番大事な命=文化財を守っていこうという意味で、周りには千手観音のように文化財を修理する「手」を配しました。赤と白と黒、これはエジプトの国旗の色です。これをプロジェクトのユニフォームにもプリントしているんです。



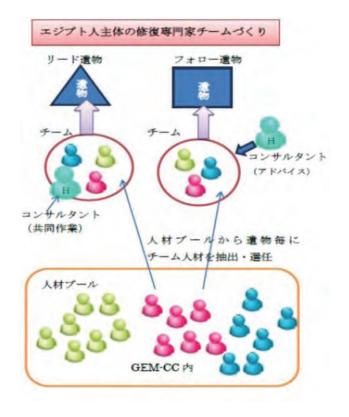


次に思いついたのがカレンダー作り。清掃員も含め GEM スタッフに、自分が一番自慢できる写真を出せと 言って応募させたところ、200 枚ぐらい集まりました。 その中から投票で選んでカレンダーにしました。中に

は不正投票もあったみたいだけどね(笑)。もちろん保存修復した文化財も撮ってあげたいが、やはり人が先。 普段保存修復した手元や作品は撮っていても、意外と自分の写真はない。だから彼らも自分たちが何やっているか、友達にも家族にもうまく説明できないんですよ。これがあれば一目瞭然です。そんな訳でできたカレンダーは現地の在エジプト大使館、関係諸機関、大学などに配りました。

### エジプト人気質

中村先生:模範的な保存修復技術を習得するために、まずエジプト人のチームと日本人の専門家が一緒になって、修復対象の文化財を1点選んで集中的に修復し、そこで学んだエジプト人のメンバーが中心になって次の文化財を直す、何かあれば日本人がアドバイスする、という方法を立案しました。その時ひとつ失敗をしました。彼らが日本人を認識できるように、図解中の日本人のマークを大きくしたところ、エジプトのメンバーが一目見て、このプロジェクトは止めだ!と言うのです。(下図参照)



なぜか?このマークの大きさが問題でした。植民地時代の思い出があって、やはり日本人は自分達を下に見ていると思ったらしいのです。あとで聞いて、私もそこまで配慮できていなかったことを反省しました。表面には見えなくとも、気持ちの中には鬱屈したもの

があるのです。何十年やってきたのにそこまで思い至 らなかった、そういうつもりではなかったが、彼らは そう思うんです。

一方、彼らは自分がミスしても、絶対自分のミスとは言いません。一度そう言ったら、自分のミスとして賠償しなければいけない。日本人は自分が悪くなくても自分から謝ってしまいがちですが、海外では考えられないことです。バスに乗り遅れた言い訳もたちどころに100とか200は言う。遅刻したことは悪いと思っているんです。ただし自分のせいではないと。そういう時に怒ってはだめですね。立ててあげないと。そういで怒ってはだめですから、陰に隠れて注意する、そうしていれば彼らも分かってくれるようになります。道具の扱いも酷いものでした。ですから始めから、「失くしたら自分で弁償しろ」と告げました。そうすると道具箱も道具もきちっと整ってくる。失くしたのが直ぐ分かりますからね。

また、一番大事な日に、これだけは起きて欲しくない、ということがその日に限って起きるんですよ。最後の最後まで気が抜けない。例えば私の運転手に、明日開所式だから朝8時までに行かなければいけないと言っているのに、わざと遅れてくるんですよ。彼がいないと開所式に行けない、すると彼が大事な人だと分かるでしょ?大事だと思われたい訳ですよ。日本人だったら考えられない発想だけど、文化が違うんだから仕方ない。暫くしたら「今日何が起こるかな?」って、驚かなくなりました。

他にも驚くべきエピソードがぞろぞろ。お話を聞いていると、確かに日本では想像もできないことばかりのようです。

「エジプトで仕事するんだったら5つの"あ"が必要」。 中村先生がエジプトで長く仕事をしていた知人に教 わった言葉です。曰く

「慌てず」「焦らず」「あきらめず」「あてにせず」「相手にせず」

相手にしないと人が相手の技術協力の仕事はできないけど。(中村先生)

### 日本だからできたプロジェクト

「慌てず」「焦らず」「あきらめず」日本のメンバーが協力をしているにも関わらず、まだまだ自分たちの宝物を心底大事にしようという気持ちが完全にはないのではないか?と、中村先生は感じています。

中村先生:GEM-CCがここまで来たのは、日本人専門家の真摯な指導のお蔭です。単なる親切だけではなく、仕事の質の高さがあった。そのクオリティをエジプト

側も認めざるを得ない。そういう日本人の仕事に対す るアプローチの仕方をちゃんと認めていたからついて きた。日本の歴史は長いでしょ。縄文式土器にしても 16000年前にあんな芸術的なデザインで煮炊きしたも のが残っているわけです。そうしたものが日本人の遺 伝子の中にはずっと残っているんじゃないかと思いま す。エジプトがいくら 5000 年 6000 年の歴史を持つ と言っても、日本にはそれより10000年前のものが残っ ているんです。だからエジプトの文化財でもペルーの 遺跡でもある程度対応出来るのは、モノづくりの精神 からきているのではないかと思います。古事記の中に も、「修理固成(つくりかためなせ)」\*3という言葉があ ります。モノを作る時はしっかりしたものを作り、作っ たものが相手の迷惑にならないよう、社会環境を乱さ ないようにと教えています。そういうことが神話の中 に書かれていて、この意識がつい最近まであったと思 うのですが・・・。

この 2,30 年日本もいい加減になってきた、と中村 先生は言います。

中村先生:大きな会社も嘘のデータを出したり改竄したり、モノづくりの精神が失われているんだよね。だから日本の経済も落ちてきてしまっているんじゃないかと思う。こんなの日本人じゃないよね。

保存修復だって、創ったものを修復して後世に残している訳でしょ。モノづくりの精神がずっと続いている。これを今の日本はもう一度見直していかなければならない。やはり日本人というのは、手を使うのが上手です。「上手」とか「お手柔らかに」とか、手が付く言葉がいくつもある。職業にも「運転手」「投手」など。手を大事にする国民なんですよ。適当にごまかして作ったものを高く売りつける国、頭使わないからと言って職人をないがしろにする国もあります。そういう国では詐欺師のように騙す人がリスペクトされるんです。

### 稲むらの火

日本でモノづくり精神が喪われ始めているというのは、 戦後の教育にその原因の一端がある、と中村先生は指 摘します。

中村先生:教育自体良いことを良い、悪いことは悪いと言わなくなっている。昔いいものがあったのなら、今からでも教えてあげれば良い。周りに例がいっぱいある訳だから、日本人だったら直ぐ分かると思う。それを言わないので、(子供たちは)何を中心として生きていけば良いのか分からない。」

日本は第二次世界大戦後で、一回価値観がひっくり返った歴史がありますね。

中村先生:我々の先輩、おやじとかお袋の世代は戦前の教育をきちっと受けているからそれまでは良かった。そういう人たちが1980年代まで日本をリードしてきました。戦闘では負けたかもしれないが、アジアの弱者を植民地から解放し、経済、テクノロジーで打ち負かし、アメリカを買うぐらいの経済力になったものの道徳力を維持できなかった。自分たちの世代は、親から伝えられたことを子供の世代に伝えきれなかったということが悔やまれます。

### ・・・まだ、間に合いますよね?

中村先生が日本人材開発センター所長としてカンボジアに赴任していた時のことです。そのカンボジアで、既に日本では忘れ去られていた「稲むらの火」という物語に再会したそうです。

「稲むらの火」というのは、1854年(嘉永7年/安 政元年)の安政南海地震津波に際しての出来事をもと にした物語で、津波の来襲に気づいた庄屋の五兵衛が、 祭りの準備に心奪われている浜辺の村人たちに危険を 知らせるため、自分の田にある刈り取ったばかりの稲 の束(稲むら)に火をつけ、消火のために村人が高台 に駆け付けることで津波から人々を救ったというお話 です。和歌山の濱口梧陵(ヤマサ醤油のご先祖様)と いう実在の人と史実をもとに小泉八雲(ラッカディオ・ ハーン)によって創作され、1897年にロンドンとボス トンから「仏の畠の落穂 Gleanings in Buddha Fields」 の「生ける神様 A Living God」として出版されました。 これにより「Tsunami」が世界語になったとのことです。 濱口梧陵はこのあとも私財を投じ、被災した村民に 日銭を払い当時としては世界一の堤防を築造するな ど、社会貢献事業にも取り組んでいます。この話は戦 前 1937 年から 10 年間、尋常科用の小学国語読本に掲 載され、防災教材としても高く評価されていましたが、 戦後 GHQ によって消し去られたため、戦後生まれの日

本人は殆ど知りませんでした。

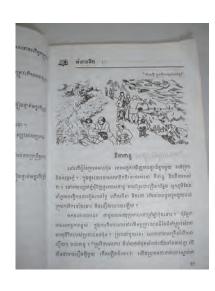
中村先生:2005年にインドネシア、スマトラ沖に地 震が起きました。カンボジアの若い人に、カンボジア には地震がないが、日本にはこういう話があるよって 伝えたら、それなら知っている、と言われ驚きました。 なんで?と聞いたら学校で教えてもらったとのこと。 カンボジアの教科書に"タドのお爺さん"として「稲む らの火」が掲載されたそうです。この話がなぜカンボ ジアで教科書に採用されたのか、カンボジアの文科省 に聞いてみたところ、ユニセフがカンボジアの物語と 日本のこの物語を持って来て、どちらがいいですか? と聞くので、「稲むらの火」を選んだ、という経緯でし た。日本には塙保己一(はなわほきいち)※4など偉業を 成し遂げた人達がいるのに、若い世代は全く知らない。 そういうことを知ったら日本人は誇りに思うでしょ。 それを極力なくしていったのが GHQ です。徐々に世代 も変わってくれば、また若い人たちが息を吹き返して 自尊心を取り戻してくれるのではないかと思うんです が・・・。

### エジプトのこれから

中村先生:10年にわたる GEM-CC での研修事業の成果として、今日本は世界に認められています。今回のコロナ禍で現在はリモートでの指導が中心ですが、それでも問題なくできているということは、この10年の技術指導の成果だと思います。今後は日本の専門家が育てた現地の人材が中心になって、エジプト国内だけではなく周辺のアラブ諸国、アフリカ諸国の人たちをGEM-CC で研修する。そうすると日本の技術が彼らを通じて世界中に広がり、彼らの自信にもなる。GEM-CCがエジプトにおける文化財保存修復の中心的な機関となり、国際的な保存修復・研究の拠点となる。それがGEM-CC を作った時の究極の目的だったんですよ。

それから、博物館のツタンカーメン・コーナーの展示





左)中村さんが『稲むらの 火』を話した現地職員のソ クンテイァさんと教科書 (タイ盤谷日本人商工会議 所所報(2007年8月号より)

右) カンボジアの教科書に 掲載された「稲むらの火」



ツタンカーメンマスクと中村先生(左から3人目)

では全部日本語の説明を付けました。日本人が観光で来館し、日本の子供たちが見て、逆に日本の5~6,000年前はどうだったかな?と、日本のことを思ってくれれば私としてはむしろ嬉しいです。

### 中村先生のこれから

このプロジェクトは 2020 年に読売国際協力賞\*5を受賞しました。

中村先生:受賞の挨拶で述べたのは、「保存修復は表に出ない地味な仕事だが、文化財は伝えていく人がいないとたちまち劣化して世の中から消えます。消えた途端に歴史もそこで断絶します。いかに後世に伝えていくか、地味だがこれからはこういう仕事が必要になる。」ということです。日本の文化財修復では、素材は全部地方で作っていますよね。材料にしろ技術にしろ、途絶えてしまうと出来ないんですよね。だから地方地域の活性化、地域の文化は絶対に無くしてはなりません。世界の環境問題に対しても、木を伐ったら必ず植林す

# 第27回「読売国際協力賞」贈賞式



読売国際協力賞



データベース作成の ADD メンバーとカイロ考古学博物館 前で

るなどの日本の文化を分かりやすく伝えていけば、この方面でも世界に貢献できるのではないか?と思っています。

今、中村先生は、ヒエログリフ専門家である村治笙 子先生に協力して、飛騨高山光ミュージアムで開催されている「特別展 古代エジプト展〜ツタンカーメンと 黄金の世界〜」のサポートを行っています。エジプト・ ミニア大学 ムスタファ・マフムード・エル・エザビィ 教授が、本物と同じサイズで再現したツタンカーメン 王の「黄金のマスク」や玉座、黄金の柩など、ツタンカー メン王墓出土品の精巧なレプリカが日本で初公開されています。(11/30 現在公開中)

https://h-am.jp/exhibition/2022/egypt/index2.html (特別展 古代エジプト展 光ミュージアム HIKARU MUSEUM)

そんな中村先生が尊敬している人物が、マレーシアの首相であったマハティール・ビン・モハマド氏であるといいます。マハティール元首相は、戦後日本が復興を遂げた原因を日本人の仕事に対する倫理観、正直、勤勉であると見定め、マレーシアの若者を多く日本へ留学させました(Look East Policy)。中村先生はマハティールさんにカンボジアの日本人材開発センター開所式に是非来て欲しいと思い打診したところ快諾されました。マハティールさんは当日イギリスから専用ジェット機で駆けつけ、カンボジアの若者を前に1時

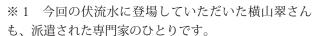


演説をするマハティール・ビン・モハマド氏

間半立ったまま話をし、また専用ジェット機で風のように去っていったとのことです。時にマハティール氏82才。その後92才で首相に復活したとのこと。一度退任後、2022年11月総選挙に97才で出馬、結果は落選でしたが今まだご健在です。

中村先生もマハティールさんに比べればまだまだ青年期。是非これからも日本の「こころ」を世界へ届けるべく、活躍されることを願わずにはいられません。 本日は、どうもありがとうございました。

(文責・NPOJCP 事務局長 八木三香)



※2 ポルポト:1975年から3年間カンボジアを支配した共産主義政権クメール・ルージュの中心人物。極端な思想により、敵対勢力、医者、教師などの知識人を虐殺し、200万人近い国民が犠牲になった。

※3 「修理固成」。 古事起に入「伊耶那岐命が伊耶那美 第三柱の神に、「是の多陀用弊流国を修理ひ固め成せ」 と 詔 して」とある。

※4 塙保己一(はなわほきいち):延享(えんきょう)3年(1746年)から文政(ぶんせい)4年(1821年)武蔵国児玉郡保木野村(むさしのくにこだまごおりほきのむら)(現・埼玉県本庄市)生まれ。江戸後期に活躍した全盲の学者。7歳のとき、病気がもとで失明したが、15歳で江戸に出て、学問の道に進む。多くの困難の中、大文献集「群書類従(ぐんしょるいじゅう)」666冊をはじめ、散逸する恐れのある貴重な文献を校正し、次々と出版。48歳のとき、国学の研究の場として現在の大学ともいえる「和学講談所(わがくこうだんしょ)」を創設し、多くの弟子を育てた。生涯、自分と同じように障害のある人たちの社会的地位向上のために全力を



中村三樹男先生と横山翠さん。 中村先生のネクタイのヒエログリフは横山さんが刺繍したもの

注いだ。

文政 4 年 (1821年) 2 月、盲人社会の最高位である総検 校につき、同年 9 月に天命を全うした。埼玉県 HP より https://www.pref.saitama.lg.jp/a0604/hanawa/hanawahokiichi.html

ヘレン・ケラーの心の支えでもあった。

※5 読売国際協力賞:「読売国際協力賞」は、さまざまな活動を通じて国際社会への貢献の重要性を身をもって示した個人や団体、企業を顕彰するため、1994年に読売新聞創刊 120 周年を記念して創設された賞です

https://www.yomiuri.co.jp/choken/ y-kyoryoku/20201030-OYT8T50078/

(2020年度(第27回)技術移転「人類の宝」守る JICA「大エジプト博物館合同保存修復プロジェクト」 チーム【動画あり】: 読売新聞オンライン (yomiuri. co.jp))

参考文献:2012年度「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」レベル I・Aコース『特別講義 エジプトのみ宝を守る』P.426より)。

### 中村 三樹男 先生 プロフィール

1970年 中央大学法学部卒業

1978 年 英国ウェールズ大学スウォンジー大学院開発 研究所修士(社会開発)

1965年 総理府公正取引委員会事務局

1970年 JICA(旧 OTCA)入団 研修事業部 総務部 情報管理課 鉱工業計画調査部

1981年 フィリピン事務所 無償資金協力部基本設計 第一課 企画部評価管理課長

1991 年 外務省経済協力局無償資金協力課 無償資金協力審査官

1993年 JICA 英国事務所設立初代所長

1996年 無償資金協力業務部次長

2000年 エジプト事務所長

2002年 札幌事務所長

2004年7月 JICA 退職

2004 年 8 月 カンボジア日本人材開発センター所長 2008 年 7 月~ 2011 年 6 月 大エジプト博物館保存修 復センタープロジェクト 総括

2011年10月~2013年10月 NHK インターナショナル アドバイザー

・2012 年 10 月 一般財団法人 日本国際協力センター 研修事業部

・2015年4月~2022年3月

大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト・第 2フェーズに引き続き大エジプト博物館合同保存修復 プロジェクト 総括

# 新理事紹介

## 今津 節生 理事

こんにちは。新たに JCP 理事に就任した今津節生です。

私の専門は保存科学です。大学で考古学を学びながら東文研で保存科学を学びました。福島県立博物館で保存科学担当学芸員を務めた後、奈良県立橿原考古学研究所、九州国立博物館を経て、奈良大学教授を務め、現在は奈良大学学長、日本文化財科学会会長を務めています。九州国立博物館では、JCPの三輪嘉六理事長が館長の頃に、博物館科学課に在籍していました。

現在の研究テーマは、3D デジタイザや X 線 CT(コンピュータ断層撮影)を使った文化財の健康診断や内部構造の研究です。また、水中考古学の発掘調査で発見された木製遺物を保存する安全・安心な方法を開発し、世界にむけて発信しています。長崎県鷹島の海底に沈む元寇沈没船や、タイ国で発見された 9 世紀のペルシャ船など水中文化遺産を保存する国際的な研究にも携わっています。鷹島海底遺跡の元寇遺物の保存事業は JCP も関わっており、海底から引き揚げた兜や「てつはう」の弾は、九州国立博物館に展示されています。かねてより文化財の保存修復を通して社会に貢献したいと考えており、このたび NPO 法人の理事となったのも何かのご縁と思います。微力ではありますが、よろしくお願いいたします。



### 今津先生プロフィール

青山学院大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程 修了福島県立博物館 保存科担当 学芸員 奈良県立橿原考古学研究所 保存科学研究室長京都工芸繊維大学より 博士号 (学術) 取得九州国立博物館 博物館科学課 博物館科学課長 奈良大学文学部文化財学科 教授 奈良大学文学部長・大学院文学研究科長 を経て現在 奈良大学学長、教授、学術博士 東アジア文化遺産保存学会会長・日本文化財科学会会長

# 新職員紹介

後閑 亜有実(NPOJCP事務局員)

2022 年 5 月より文化財保存支援機構に入職いたしました後閑亜有実と申します。初めてお会いした方からはしばしば「なんと読むのですか?」と尋ねられますが、これで「ごかん」と読みます。ものの本によりますと、



なんでも平安期頃からある地名に由来した苗字だそうで、主に北関東に集中して分布しているとか。確かに、本家がある地域ではあっちにもこっちにも後閑さんの家があって、よくある苗字に見えるのですが、どうやらその光景の方が珍しいようです。

さて、ずいぶん古そうな名前ですし、本家の蔵には古文書やらが積んであって、そこから興味を抱いてこの業界に……と、思われそうですが、残念ながら特に史料と出会ったこともなく。最初は絵画や古文書を読み解きながら歴史を学んでいたのですが、「こういうものを修復する人たちもいるんだよ」という話を聞いたのが今思えばきっかけだったのでしょう。いつの間にか興味は文化財修復の道へと方向転換し、学校へ入り直し、博物館で事務補佐をしたり、修復工房で修復をしたりしながらここまできました。

これからは修復もちょっとできる事務職員として一生懸命文化財の継承に尽力して参りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

# 令和4年度実践コース取材スピンオフ

### セミナー現場取材裏話し 本 茉梨絵 (NPOJCP 事務局員)

今年度はかなり早い段階からスタッフ内で打ち合わせを重ね、準備を行ってきました。テーマは「文化財のレッド リスト」でいこう!と決まった時に、やはり現場取材して生産者さんの声をお届けしたい。ではどうやってたら伝え られるか…

昨年度まではハンディカメラとノートパソコンで対応していましたが、本格的に屋外での収録となると手ブレや集 音機能面に加え、高温多湿な日本の夏に機器が影響を受けるのではと心配事が山積みでした。現場取材は一発勝負。 新しい撮影器材も導入して万全な体制で臨みました。幸いなことにどこの現場もお天気に恵まれ、場の雰囲気をその まま伝えられる講義になったと思います。

次に待っているのは編集作業です。まず全体の構成を考え、必要に応じ て各材料の特性や基礎的なことを補足しました。また、ナレーションの 吹込みも今年度はじめての試みです。やはりプロは違う…!

初めてわかったこととして、屋外収録では、思いのほか周囲の環境音が 入ってしまうことでした。蝉の声や川のせせらぎ、行き交う車の音が大 きく感じ、帰って確認するまで気づかずに驚いたものです。聴き取りづ らい場合は字幕を入れ、音声だけではわかりにくい単語にテロップを挿 入したりと、スタッフ一丸となって編集に取り組んだセミナーでした。

はてさて次年度のセミナーはどうなるのでしょうか…!

嶋田先生のトロロアオイ畑での収録の一コマ。照りつける 太陽を背中で受け止める現場取材編集担当の髙橋



### 事務局裏話~広報の向こう側

### 松田 佳代(NPOJCP 非常勤スタッフ)

実践コースのオンデマンド配信も3年目となり事務局スタッフも慣れてきたところではありますが、なかなか読め ないのが広報の成果です。SNS の効果はあるのか、皆さんがどうやって実践コースの情報を得ているのかを知りたく て、申込フォームに「実践コースを何で知りましたか?」という質問を設けました。結果は、①募集要項・ポスター を見て、② JCP のホームページ、③ JCP のメールマガジン、④ JCP の SNS、の順でした。郵送の紙媒体が最強で SNS が伸びていない…。確かに募集要項の発送先はここ数年で増やしたので、その成果ではあるのですが。

時々チェックしていたのが実践コース専用サイトのアクセス解析です。図は8月12日~11月9日までの90日 間の解析の一部で、最多の「icpnpo.org」は ICP のホームページ。2 番目の直接検索は募集要項に載せた OR コード 読み込みと、インスタからの URL のコピー&ペーストと思われます。意外だったのが Twitter。 JCP は Twitter をやっ ていないのになぜ?と調べてみると、博物館などの情報をまとめているアカウントで取りあげてくださっていたよう



トラフィックカテゴリー①	アクセス元①	サイトのセッション数: 🔓
参照元サイト	jcpnpo.org	381
直接検索	直接検索	365
参照元サイト	HPに掲載してくださった	た他団体 159
SNS	Twitter	121
参照元サイト	HPに掲載してくださった	た他団体 83
オーガニック検索	Google	54
SNS	Facebook	62
不明	不明	20
オーガニック検索	Bing	11
オーガニック検索	Yahoo	9

です。Twitter からの アクセスは2日間ほど に集中しており、瞬発 的拡散力に優れた媒体 なのだな、と感じまし た。対してFacebook は全期間を通じて少し ずつ伸びていくタイプ で、SNS の性質の違い を考えさせられる広報 分析でした。

### 編集裏話

### 髙橋 志歩 (NPOJCP 非常勤スタッフ)

昨年より、本格的にセミナーの収録・編集に関わらせていただきました。髙橋です。

2020年に教えていただいたことを元にスケジュールをこなしていくのが精一杯で、至らない点が多く、講師や受講生、事務局の皆様にお手数をおかけする部分が多かったことを反省しております。

収録・編集していく中で、1時間の講義というのはあっというまなのだと感じています。

先生方が知っていること全てをお聞きすることはできないですし、どの部分に重点を置き、どこまで盛り込むのか 構成を考えるだけでも一苦労でした。

現地でいろいろ見せて頂いたり、お話を聞かせていただいて、全てがとても魅力的で面白かったのですが、尺の都合上、泣く泣くカットした部分もあります。スタディツアーやワークショップなどをまたやれる日が来たら、皆さんにも是非現地で見て聞いて、体験していただきたいです。

また、編集をする上で去年はなかった課題が一つ。今年は取材で野外撮影が多く、 撮影時には自然が豊かだな一くらいに思っていたのですが、帰宅し映像を確認する と、蝉が鳴き、風が吹き、小川が流れるなどの音が先生の話す声と競り合っており、 これには参りました。

他のスタッフも総出で字幕起こしを行いました。

知らない専門用語がパラパラ出てくるので、普段見ないような、農業林業、産業などを管轄する庁、また諸団体や企業の HP をクリックし用語や意味を探しました。でも、これが楽しかったです。このような機会がなければ覗くことのない世界があり、修復以外にもニッチ(と言っていいのか…)な業界があるのかと驚きましたが、諸々、情報を得て勉強するのに大変お世話になりました。



製炭現場にて

# 書籍紹介

『まつりは守れるか 無形の民俗文化財の保護をめぐって』(石垣悟編著)

【執筆者】谷部真吾/清水博之/伊藤直子/石堂和博/相川七瀬/矢田直樹/高橋史弥/久野隆志/原島知子/小林稔/小川直之

【コラム寄稿】後藤知美・松本貴文・俵木悟・福持正幸・嵩和雄・藤原洋

税込価格: 2750 円

発行:八千代出版株式会社

JCP 登録会員で、國學院大學観光街づくり学部准教授の石垣悟先生が編集執筆をしている出版物です。

「まつり」の危機が叫ばれている昨今、各分野の著者がそれぞれの立場で 地域に寄り添い、活動する中で、できたこと / できなかったこと / 感じ ていること / 実践していることなどを、具体例を交えつつ著述しています。 http://www.yachiyo-net.co.jp/



# ご入会ありがとうございました。

(令和 4 年 11 月 30 日現在入会者数)

理事 9名監事 1名評議員 1名

■ 維持会員 16 名 (理事・監事含む)

■ 登録会員 155 名■ 一般会員 103 名■ 学生会員 27 名■ 賛助会員 19 件

株式会社 宇佐美修徳堂 株式会社 岡墨光堂

京都芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター

株式会社 光影堂

一般社団法人 国宝修理装こう師連盟

コネクト株式会社

修理工房 宰匠株式会社 株式会社 坂田墨珠堂

株式会社 修護 株式会社 修美

株式会社 松鶴堂

株式会社 東都文化財保存研究所

株式会社 トリアド工房

長谷川和紙工房

株式会社 半田九清堂

株式会社 文化財保存

一般財団法人 三谷文化芸術保護情報発信事業財団

山領絵画修復工房 株式会社 リボテック

(アイウエオ順)

ご寄付をありがとうございました。

(令和3年度)

NPO 法人 住みよい地域づくり推進協議会 様 (令和 4 年度)

井宮 公之 様

増田 勝彦 様

\_\_\_\_

# NPO JCP の活動に 参加してみませんか?

■登録会員:年会費 7,000 円

文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト 遂行に協力する個人。

登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、 文化財に直接関わる専門家とは限りません。

■一般会員:年会費 5,000円

この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

■学生会員:年会費 3,000円

大学または大学院に相当もしくは準じる教育機関の学籍を持ち、この法人の目的に賛同して入会する個人。

□会員特典:情報誌の送付

講演会/研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、ファックス、電話、メールにて申込用 紙をご請求ください。折り返し資料をお送りいたします。ま た、ホームページからでも入会申込ができます。

TEL: 03-3821-3264 / FAX: 03-3821-3265

E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org / URL: www.jcpnpo.org

※ JCP では、随時寄附を受け付けております。

下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。

・郵便振替 00120-4-10545 NPOJCP

・三菱東京 UFJ 銀行 四谷三丁目支店 普通預金 3960340 特定非営利活動法人 文化財保存支援機構 理事 三輪嘉六

・みずほ銀行 根津支店

普通預金 1727893

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

### NPO JCP NEWS vol. 37

2022年12月15日発行

# ¥

### 

### 事務所所在地

### 本部

〒 110-0008

台東区池之端 4-14-8 ビューハイツ池之端 102 号 TEL: 03-3821-3264 FAX: 03-3821-3265

### 関西支部

京都芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター内

TEL: 075-791-8519

### 九州支部

〒 810-0022

福岡県福岡市中央区薬院 2-17-29-505 E-mail: kyushushibu@jcpnpo.org



ルールに囚われずプロジェクトを推進していく中村三樹男 先生のお話しを伺っていて、UNHCRで活躍した日本人女性 緒方貞子さんを思い出しました。緒方さんも国外避難者のみ 難民と定義する国連のルールを破り、自国内避難民も救済の 対象としました。時にルールや手段が目的化してしまうのが 組織の陥穽です。常に目的を思い起こしながら進んで行きた いと改めて思いました。(M.Y)

仕事をしていると日々増えていくタスク処理に必死になりがちです。ふとした時、「あの時のこれが繋がった」瞬間に出会うことがあります。きっとこの積み重ねがいつか轍になるのだなと思いました。ついつい一人で仕事している気になりがちですが、喜怒哀楽があるのも周りに人がいるからこそ。当たり前にならず「その人の気持ちの向こう側」を感じられる余裕を持ちたいものです。(M.M)

〈編集協力〉久下 有貴(NPOJCP 登録会員)